

詩篇118篇

〔ハレルヤ〕 117:2f

《その恵みはとこしえまで》

- 1 主に感謝せよ。主はまことにいつくしみ深い。その恵みはとこしえまで。
- 2 さあ。イスラエルよ、言え。「主の恵みはとこしえまで」と。
- 3 さあ。アロンの家よ、言え。「主の恵みはとこしえまで」と。
- 4 さあ。主を恐れる者たちよ、言え。「主の恵みはとこしえまで」と。

《主に身を避けよ》

- 5 苦しみのうちから、私は主を呼び求めた。主は、私に答えて、私を広い所に置かれた。
- 6 主は私の味方。私は恐れない。人は、私に何ができよう。
- 7 主は、私を助けてくださる私の味方。私は、私を憎む者をものともしない。
- 8 主に身を避けることは、人に信頼するよりもよい。
- 9 主に身を避けることは、君主たちに信頼するよりもよい。

《取り囲む敵からの救い》

- 10 すべての国々が私を取り囲んだ。確かに私は主の御名によって、彼らを断ち切ろう。
- 11 彼らは私を取り囲んだ。まことに、私を取り囲んだ。確かに私は主の御名によって、彼らを断ち切ろう。
- 12 彼らは蜂のように、私を取り囲んだ。しかし、彼らはいばらの火のように消された。確かに私は主の御名によって、彼らを断ち切ろう。
- 13 おまえは、私をひどく押し倒そうとしたが、主が私を助けられた。
- 14 主は、私の力であり、ほめ歌である。主は、私の救いとなられた。

《主の右の手》

- 15 喜びと救いの声は、正しい者の幕屋のうちにある。主の右の手は力ある働きをする。
- 16 主の右の手は高く上げられ、主の右の手は力ある働きをする。
- 17 私は死ぬことなく、かえって生き、そして主のみわざを語り告げよう。
- 18 主は私をきびしく懲らしめられた。しかし、私を死に渡されなかった。

《エルサレム入城の歌》

- 19 義の門よ。私のために開け。私はそこから入り、主に感謝しよう。
- 20 これこそ主の門。正しい者たちはこれより入る。
- 21 私はあなたに感謝します。あなたが私に答えられ、私の救いとなられたからです。
- 22 家を建てる者たちの捨てた石。それが礎の石になった。
- 23 これは主のなされたことだ。私たちの目には不思議なことである。
- 24 これは、主が設けられた日である。この日を楽しみ喜ぼう。

《祝福の応答》

- 25 ああ、主よ。どうぞ救ってください。ああ、主よ。どうぞ栄えさせてください。
- 26 主の御名によって来る人に、祝福があるように。私たちは主の家から、あなたがたを祝福した。
- 27 主は神であられ、私たちに光を与えられた。枝をもって、祭りの行列を組め。祭壇の角のところまで。
- 28 あなたは、私の神。私はあなたに感謝します。あなたは私の神、私はあなたをあがめます。
- 29 主に感謝せよ。主はまことにいつくしみ深い。その恵みはとこしえまで。

111 篇から続いてきた「ハレル詩篇」の最後となります。たった二節しかなかった前篇と較べて比較的長い詩ではありますが、いよいよ待ち受ける 119 篇の序章と言ってもよいでしょう。「ハレル詩篇」と呼ばれる割には「ハレルヤ」がどこにも入っていない点が気になりますが、114 篇のときと同様、前篇末尾の「ハレルヤ」を借用することにいたします。

キーワードを色分けすることにより、本篇の構造が少し整理しやすくなるでしょう。1 節は「感謝」(תודה/ホドゥー)でもって始まり、19 節以下でも「感謝」が散りばめられています。1～4 節と 19～29 節は(本篇全体と言ってもよい)、エルサレム神殿を巡礼する礼拝者たちの「入城の歌」と捉えることができます。「恵みはとこしえまで」と、喜び歌いつつ詣でる人々の群を想像しながら読む必要があります。「イスラエルよ」「アロンよ」「主を恐れる者たちよ」という呼びかける表現の変化は、「全イスラエル」を表しているでしょう。「恵みはとこしえまで」は最後にもう一度登場し、本篇を締めくくることとなります。

書かれた時期はおそらく捕囚からの帰還後、エルサレム神殿が再建された時でしょう。22 節の「家を建てる者たちの捨てた石。それが礎の石になった」というフレーズはそのことを暗示しており、ここでは「家を建てる者たち(異邦の国々)」が蔑んで「捨てた石(イスラエルの民)」が、神の不思議な導きによって回復させられ、「礎の石(世界中の民を神へと導く器)」として立てられたことを言い表しているようです。その意味で、エルサレム神殿は「回復の象徴」「神がイスラエル民族と共におられることの証」「世界の中心」と捉えられたのです。22 節は新約聖書においても重要な聖句なので、後ほど改めてふれることにいたします。

一段下げた所(5～18 節)を概観すると、敵対者からの解放が想起されていることが分かるでしょう。苦しみの中にあつたとき、詩人は主を呼び求め(5 節)、主に身を避けました(8 節、9 節)。奴隷のような境遇にあつても、心の内で主を避け処とすることができるのです。そのとき、主は「私の味方」となってくれたことが証しされています(6 節、7 節)。

民を「取り囲んだ」(10～12 節)異邦人の勢力は、強すぎて現実には手も足も出ないものだったのでしょう。捕囚中の苦悩が窺えます。詩人は「主の御名によって、彼らを断ち切ろう」と繰り返していますが(10～12 節)、「断ち切る」とは「追い払う」というニュアンスで言われていると思われます。神は如何に強大な敵をも蹴散らしてくださる。それがいつの日になるかは分からないけれど、そのことを信じて解放の日を待ち続けたのです。

主は祈りに応え、「救い」(14 節、15 節、21 節)を与えてくださいました。15 節と 16 節に何度も出てくる「主の右の手」という表現は、主の力強さをよく表しています。これまでも学んできたように、「右」は「力」の象徴です。具体的には、主はペルシャの王を奮い立たせ、バビロンを打ち破り、捕囚民を解放へと導いてくださいました。この戦況の変化を伝え聞いた人々は、どんな思いで過ごしていたのでしょうか。「私は死ぬことなく」(17 節)、「私を死に渡されなかった」(18 節)と言われているように、詩人は異国の地で死ぬことも覚悟していたのでしょう。

神殿が再建され、喜び勇んで歩みゆく巡礼者たちは、いよいよその門をくぐろうとしています。新会堂建設が終了し、献堂式に人が集まるのに似たイメージでしょうか。「義の門」(19節)は、ここにしか出てこない珍しいことばです。どこか、主イエスがご自分を指して言われた「わたしは門である」という比喩を思い起こしませんか。

わたしは門です。だれでも、わたしを通過して入るなら、救われます。また安らかに出入りし、牧草を見つけます。(ヨハネ 19:9)

この「まことの門」をくぐって信仰者は父なる神の許へと行くのです。主イエスがご自分を「神殿」と呼んでおられる箇所も引用しておきましょう。

この神殿をこわしてみなさい。わたしは、三日でそれを建てよう。(ヨハネ 2:19)

新約聖書には、22節を主イエスの死・復活・昇天に適用している箇所が複数存在します。

- ・ 「あなたがた家を建てる者たちに捨てられた石が、礎の石となった」というのはこの方のことです。(使徒4:11)
- ・ それは、こう書かれているとおりです。「見よ。わたしは、シオンに、つまずきの石、妨げの岩を置く。彼に信頼する者は、失望させられることがない。」(ローマ 9:33)

詩篇 118:22 に出てきた「礎の石」は、直訳すると「隅のかしら」となります。台の四隅や城壁の隅を表すことばで、その建物を支える土台の最も重要な部分を指します。裏返せば、これを壊してしまえば建物はバラバラになるということです。主イエスはご自分をイスラエルにとってそのような重要な存在だと言っておられたのです。しかし、その存在が一度取り去られる時が来る。それが、十字架の死でありました。多くの方は、イスラエルの希望が取り去られたと思いました。ところが、主イエスはその死によって多くの人を罪から贖い、復活により永遠に変わることをない契約とされたのです。まさに「礎の石」としての復活でありました。

25節の「どうぞ救ってください」ということばは、原文では「הוֹשִׁיעָה נָא / ホーシーアー・ナー」であり、私たちがよく使っている「ホサナ」の原型です。これもまた、主イエスがロバの子に乗ってエルサレムに入城したときに、待ち受けていた人々が木の枝を道に敷いて出迎えた際に叫ばれたことばです。

そして、群衆は、イエスの前を行く者も、あとに従う者も、こう言って叫んでいた。「ダビデの子にホサナ。祝福あれ。主の御名によって来られる方に。ホサナ。いと高き所に。」(マタイ 21:9)

この群衆の念頭には、明らかに本篇 25~26節の聖句があったことでしょう。神殿に詣でる民を迎え入れる祭司たちが、この人々を祝福する(ベネディクトゥス)。この祭司は主イエスの型でありました。主イエスこそ、礼拝に赴く信者たちを両手を広げて迎え入れ、祝福してくださる方なのです。

以上のように、118篇はキリスト論的色彩の豊かな詩篇でありました。この詩篇のことばを成就するために主イエスが来られ、私たちと契約を結び、祝福し、感謝の歌を口に授けてくださることを改めて心に留めたいと思います。

あなたは、私の神。私はあなたに感謝します。あなたは私の神、私はあなたをあがめます。主に感謝せよ。主はまことにいつくしみ深い。その恵みはとこしえまで。(28~29節)